

# 中之島に颯を放つⅠ/Ⅱ/Ⅲ 大学博物館と共創する アート人材育成プログラム

- 大阪大学中之島芸術センター
- 大阪大学大学院人文学研究科
- 大阪大学総合学術博物館





# 中之島に鼯を放つ I / II / III

神出鬼没にして、いささか好戦的、かと思えば逃げ足も速く、夜行性、都市農村の区別なく出没する「鼯」。

アートを鼯になぞらえ、都市へと放つプロジェクト。

大阪大学中之島芸術センター、大阪大学大学院人文学研究科、大阪大学総合学術博物館が共同し推進する。

今日のアーティストには、多様な芸術ジャンルに精通し、現代文化の複雑な諸課題に柔軟に対応できる実践力が求められる。

このプログラムでは、統括セッションと4つのリサーチ・フレームを設定。学際性に富み、アーティストとの交渉能力を備え、地域社会とのファシリテーション力を持ち、アート創造のプロセスに関わることのできる能力を持つ人材を育成する。



## 大阪大学中之島芸術センターの開設

2023年4月に中之島センターが改修され、3、4階部分が「アートスクエア」となり、新たに設置された全学組織「中之島芸術センター」がここを拠点として活動している。

「中之島に颯を放つ」のプロジェクトもここを拠点に活動しており、受講者数はそれまでの20～30人台から40～50人程度に増加した。



# 人材育成目標 1

目指す人材像・育成対象者)

- 1) 美術、音楽、演劇など、多様な芸術ジャンルに精通し、展覧会や上演など総合的にアートの実践能力をもつ人材
- 2) アーティストとの交渉能力を備え、地域社会とのファシリテーション力を持ち、アート創造のプロセスに関わり、社会に還元する能力を持つ人材
- 3) アーティスト、アートディレクター等とアートの受容者とが交流をし、今日のアートの意義を多面的に発信・研究できる人材

# 人材育成目標 2

## 人材が必要な背景

大阪の中之島エリアは、美術館やコンサートホール、科学館、国際会議場などの文化施設や歴史的建造物、企業の高層ビル群、公園や水辺の自然が共存している。「水都大阪」を象徴する土地で、常に文化・芸術が創造される可能性を持っている。大阪大学中之島芸術センターでは、アートの教育研究を推進し、学術と芸術の発信起点となり、社会との共創を目指している。学術と芸術の両者を学んだアートの実践者の教育は喫緊の課題となっている。対象は、学生だけでなく広く社会人などとも協働し、性別や年齢、社会的地位にとらわれないアートマネジメント人材を育成する必要がある。



# 人材育成目標 3 育成対象者

## 育成対象者

受講生：44名（男性13名、女性31名）／属性：公務員：2名、財団・NPO等職員3名（劇場等芸術関係3名）、小中高教員2名（芸術関係1名）、学校職員4名、会社員12名、学生・大学院生4名、個人事務所経営4名（芸術関係2名）、フリーランス（芸術関係）12名、アルバイト他2名／職種：芸術系技能職11名、その他技能職3名、教員職2名、総合職11名、事務職10名、研究職1名、学生・大学院生4名、無職2名／年代：10歳代2名、20歳代5名、30歳代5名、40歳代10名、50歳代7名、60歳代14名、70歳代1名

# 育成プログラムの内容

プログラムを統括セッションとリサーチ・フレームに大きく2分する。

統括セッションでは、オープニング・セミナー、サマー・スクール、クロージング・シンポジウムを実施している。また最終年度となる本年度では、受講生をジュニアとシニアに分け、シニア受講生が中心となってアーカイヴ・プログラムを担当し3年間を総括する。

リサーチ・フレームでは、「場所のナラティブ」「アートとその分身」「臨床のアート」「日常のポイエティック」の4つを設定し、受講生はそれぞれのリサーチ・フレームを専属で受講している。

同時に、別のリサーチ・フレームも一部受講可能とし、リサーチ・フレームを横断できるように設定する。各フレームの中には、レクチャー、リサーチ、ワークショップ、クリエーション等のステップを組み込み、基礎から応用、成果公表まで配置してアート・プログラムを推進する。





# 「場所のナラティブ」

初年度より3年目まで、劇作家・演出家の林慎一郎を招き、受講生を交えて演劇制作のワークショップとパフォーマンスを行った。

リサーチ型パフォーマンス作品『中之島デリバティブ I～Ⅲ』を1年目は吹田市文化会館（メイシアター）、2年目は中之島芸術センタースタジオにてツアーパフォーマンス上演、3年目は同センターにてパフォーマンスの夜間上演を試みた。受講生らのリサーチ結果は、劇中でパフォーマンスとして報告された。

また併せてツーリング・リサーチとして、中之島界隈の船上ツアーを行い、水路から中之島の記憶を掘り起こした。





# 「アートとその分身」

初年度より「人形」をテーマに3つの枠を設け、それぞれレクチャーやワークショップ、稽古等を重ね、上演や音声ガイドといった成果に繋げた。

今年度も以下3つの活動を行い、上演に向けて受講生らとともに準備を進めている。

«A»兵庫県立芸術文化センター 薄井憲二バレエ・コレクション資料を活かした人形の生と死『ペトルーシュカ』のリエンアクトメント。

«B» 『ドン・キホーテ』に基づく人形音楽劇「ペドロ親方の人形芝居」（マヌエル・デ・ファリャ）を浄瑠璃人形と共に上演。

«C»竹本織太夫氏と鶴澤清志郎氏をお迎えし、視覚障碍のある方と一緒に「感じる」浄瑠璃のインクルーシブな上演設計を考える。





# 「臨床のアート」

現代アーティストの檜皮一彦氏を講師として迎え、異なる領域の研究者やアート分野のプレイヤーを交えて行うレクチャー、ワークショップのほか、企画プラン提出を設定しアクチュアルな実践としてのアートマネジメントを学んだ。

講師が車椅子ユーザーであり、「アクセシビリティ」や「合理的配慮」への理解も課題として設定されている。

初年度は大阪大学総合博物館での展示、2年目は大阪中心地の商業施設内での展示を行った。三年目は文化複合施設での展示やワークショップ実施にむけて受講生らが準備を進めている。





# 「日常のポイエティック」

東大阪市や八尾市の町工場をテーマに、受講生とともに工場の製品や職人の技術をアートとして捉えなおし、初年度、2年目は情報発信についての学びとしてインタビューの編集や冊子の作成を行った。

今年度は受講生とともに企画を立ち上げ、町工場の新たな魅力を引き出すことを試みている。企画の立案・実施によってイベントを立ち上げる力を養うとともに、町工場アートの可能性を探る。

また、楽器の演奏や芸能を活用し広告・宣伝を行うちんどん屋に着目し実践的に学んでいる。



# 育成成果報告

本プログラムでは、芸術諸機関等に既に勤務する者、将来的にアートマネジメントを志す者を受講生として採用している。過去2年間で、のべ76名が受講し、47名の修了を認定した。修了した受講生は、各領域で学習成果をもとに自身の活動を発展させている。

(一例)

- ・ 近隣地域のアートコーディネータープログラムを受講・修了し、自身で企画を立案・実施
- ・ 劇場や施設におけるアクセシビリティや文化芸術の社会包摂の可能性について勤務先で提言
- ・ アーティストと調査を継続させ美術館にて共同制作者として作品を発表
- ・ 2年目の受講生が講師として3年目のプログラムに参画





# 将来展望：「共創芸術」の場を創出

大学における高度教養教育及び社会人教育のプラットフォーム



## ● 多彩な教育プログラム

高度副プログラム「アート・ファシリテーション」  
オナー大学院「アーツ・ベスト・リサーチ」  
社会人教育プログラム

## ● 大学発の「アートセンター」として発信

大阪大学大学院人文学研究科芸術学専攻、

（美学・文芸学、日本東洋美術史・西洋美術史、音楽学・演劇学、アート・メディア論）

大阪大学総合学術博物館と協働しながら、大学発の「アートセンター」として発信。